

(基調講演)

キース・マクナマラ 米国陸軍准将

米国ミサイル防衛庁 副長官

ありがとうございます。キース・マクナマラです。ミサイル防衛庁の副長官を務めております。本日私は技術的側面、これが最も革新的な戦略的な意味合いを持つものであると考えておりますが、その技術的な観点に立っての見解を述べたいと考えております。ここに見られる兆候は我々両国のためのものであり、両国の協力を可能にし、またより重大なことには、先ほど長官がおっしゃったように日米両国の防衛を進歩させることにつながる兆候であり、この点で私は先ほどご講演された長官に全く同感であります。

私の最初のスライドではまず、1990年代初頭の脅威の観点に基づいて、我々がどのような地点にいたのかということを表しております。ご承知の通り北朝鮮の脅威が増大し始めたのもこのときであり、これは現在でも拡大しているわけです。誤解してはいけないのは、時系列の観点からすれば間が空いているということですが、この間に開発が進み、技術が内外へ移転され同様に他の国々にも拡散していったわけです。ミサイル防衛の観点からは緊張は高まっておりこれに対する対策がますます必要になっております。

率直に申し上げまして、90年代、焦点を当てた開発に着手するという事に遅れがあったものの、しかし、別途解決策が考案されそれが PAC3 の開発となりました。米国側の観点からは90年代、まず国家の安全保障システムに焦点が置かれ、その後地域や責務を越えて戦場における司令部をサポートすることに焦点が置かれました。この転換は2000年ごろ、ブッシュ大統領が就任したのと同時期となります。明らかだったのは、我々は強固な能力を必要としていたことであります。第一に統合されていて、また第二に友好国、同盟国とともに開発に取り組めるものであります。それによって我々は弾道ミサイル防衛システムを開発することになったわけです。過去2~3年弾みがついており、多くの成功をこの期間に収めているということです。米国側の観点からだけではなく日本側からも配備や協力のための協定の締結や、また将来にわたる協力開発、例えばイージス SM3 やブロック 2A など、両国に有用なものが考えられております。長官がご指摘の通り時間というものが重要なポイントになるかと思われます。しかし、いくつかのシステムに関しては実際に配備に時間がかかるものもございます。この意味で協力というのは開発の点からだけでなく、運用の点からも重要であると考えます。

大統領はまさにこの計画に尽力しております。これはアメリカ国民の防衛の為だけではなく友好国や同盟国にも防衛力を提供する為です。同様に弾道ミサイル防衛の観点からは、我々はこのシステムの開発に焦点をおいておりますし、また協力的な開発によって米国自

身を展開中の米軍で防衛するとともに友好国、同盟国についても、短距離から大陸間弾道ミサイルまであらゆるミサイルから防衛するということに着目しております。脅威に対して強固なミサイル能力を構築することによって、防衛網を突破されることを防ぐということです。

これは現在のミサイル防衛庁の計画であります。重要であるのは補完的にセンサーやファイアーコントロールや武器等があり、それを統合するということです。指揮・司令また戦闘管理の観点からその能力を最適化するということです。統合するということの過程は、アメリカのシステムだけでなく、運用上の観点から友好国や同盟国のシステムも統合するということです。数々の開発計画が進行しており、その中には配備に近いものや、まもなく配備されるというものもあります。PAC3 ですがこれは非常に強固なシステムであり、日本においてもまもなく配備されるというものです。また最近では THAAD ミサイルの成功があります。前回のテストの状況をこれからご覧頂きたいのですが、結果は良好であり、この能力については非常に楽観視しております。地上配備型のミッドコースでの防衛ですが、戦略的な迎撃システムとして IRBM、ICBM に対抗するものであります。これは最近の北朝鮮の状況においても対応可能であります。それからマルチプル・キル・ピークルですが、これは複雑な脅威に対抗する為の開発であります。イージス BMD も開発が進んでおり、ますます強固になっています。開発・配備両方の側面から協力をしているところであります。ここで重要なのはこれが兵器体系だけではなく、弾道ミサイルシステム一連にわたって長距離追跡をするセンサーや、ファイアーコントロール、武器を含めた能力であるということです。開発途中の段階ですが、ブースト段階での迎撃、これはこの10年のうちに配備が可能であると考えております。しかし、未だ開発段階でのテストが多くあるでしょう。この双方の能力に対する信頼性が2008年以降に高まると思います。センサーに関して言えば、強調しすぎることはないかとは思いますが、強固なセンサーがあります。しかし、それらは未だ短距離の弾道ミサイルに関しては不十分であり、長距離の大陸間弾道ミサイルに対しても不十分といえます。特に地球全体をカバーするということになりますので、センサーに関しての挑戦は非常に大きいものであるといえます。

これは統合における外観を現しております。昨年私がお話した開発の方向性についてですが、ミサイル防衛システムをひとつのファミリー、1セットとして構築し、最終的にはシステム・オブ・システムズという形で統合して弾道ミサイル防衛を総称するということです。この実現手段には統合が明らかに欠かせないものとなります。一点強調したいのは、単に米国のシステムの統合ではなく、友好国や同盟国との協力的な統合を進めるという点です。これは大変重要なことでありまして、このことによってのみ必要な強固さをシステムやセンサーに持たせることが出来、これによって現在の単純な脅威、そして将来的にはより複雑化した脅威に対することが出来るのです。この例は弾道ミサイルの飛翔を表しております

す。ここでお気づきになるかと思いますが、様々なセンサーがありまして、このような中で迎撃をする決定を行います。ミッドコースの高高度での迎撃をすることに関して、先ほどの長官がおっしゃった非常に重要なポイントは、これは技術的な側面であり、このシステムが機能に関する例を示しているということです。ただこの図で示されていない点として、このような色々な決断の過程と計画は弾道ミサイルの発射以前に行われるということです。計画に関しては、どのような決断と行動をするかということの権限を作戦部隊に移譲するという政治的な側面がありますが、例えばそれは迎撃体の発射に関して、ミサイルの総数の問題、電話会議や協議の進行についてです。これらは十分に事前に議論されなければなりません。先ほど長官がおっしゃいましたが私も強調させていただきますと、時間は非常に短いということです。時間は非常に短いのでこの例が実現する前にセンサーを統合させ、ファイヤーコントロールを統合させるということが重要であります。

こちらは計画の戦略を示しております。我々はまず北朝鮮の脅威に対する米国及び友好国、同盟国の防衛ということに焦点を当てました。今回の7月の状況においてその能力は完備されていると思います。またそのような体制があるということで安心をしております。と同時に、今後数年間においては、中東の脅威を認識し対策を講じていく必要があります、また同様に迎撃体の総数、弾道ミサイルに対するセンサー能力も包括的に強固にしていく必要があります。

これは今年末までの運用体制の概観であります。センサーや迎撃体の強固さにもよりますが、おおよそ北朝鮮の脅威に対しては現在もそして将来的にも良好であると言えるでしょう。我々は能力を保持しており多数の選択肢を持ち、地域の司令に対し適切な配備のための能力が備わっております。また同時にアメリカを防衛する能力も備わっております。同時に我々は中東の脅威に対する迎撃体の利用に関する初期の能力の開発に関する研究を行っております。この文脈ではこれらは米国の防衛ですが、しかしながら私が強調したいのはこれが我々の望む能力全てではないということです。究極的に必要とされる完成された能力というものは、より強固な一連のセンサーであり、より多くの迎撃体であり、また友好国と同盟国の統合と協力であり、それによってさらなる包括的な能力を得て、我々が将来直面するだろう複雑化する敵国の脅威に対抗できることであります。

要点として、先ほどより強調いたしておりますのは、指揮統制された戦闘管理であります。これが統合の為の非常に重要な鍵であり、これを欠く場合には能力の重複が起こりまた武器の消耗が激しくなります。C2BMCと成功裏に統合された能力によって、より統合された層状の防衛が可能となり、センサーの予算効率も高まります。複数の地域にわたって、即ち韓国、日本、アメリカにおいて配備をするのであればこのようなセンサーが多層的でありまた究極的にはどの時点においても多様な方策を提供するものであるべきものです。セ

センサーの観点からするとこれは大変複雑ですが、武器体系を開発することでこの地域全体に複雑な、しかし、体系の取れたシステムを配備することが可能になります。繰り返し強調いたしますが、統合が非常に重要であるということです。これはアメリカ側の視点から見た C2BMC であります。将来の C2BMC の評価と統合の能力またその権利を与えることは同様に重要であります。なぜならこれにより我々は将来に直面するだろう複雑な脅威に対抗する最高に強固な能力の手に入れることが出来るからです。

私が申し上げますように C2BMC はアメリカにとってひとつの基盤となっております。日本においても同様の機能を評価の側面から計画しているということですが、ここで焦点を当てていること、何を進化させようとしているのかということについてご覧いただけると思います。特に機能的にどうするのかという点から、我々はこれらの能力や機能を全て実現し C2BMC を通じて真の弾道ミサイル、ファミリー・オブ・システムと呼ばれるものを実現しなければならないということです。

相互運用性については先ほどお話いたしました C2BMC が、合同作戦という環境の中で実現していくのですが、これらは同時に友好国、同盟国の中での様々な活動のつながり、通信、情報交換、共同作業等を通じて運用されなければなりません。そのためにはお互い会話をする際のメッセージプロトコルや電子的なコミュニケーション手段も重要であり、これは決して微細な問題ではないということです。

色々申しましたが、協力という観点から申し上げるのであれば、戦略的な観点から先行きは明るいといえるでしょう。日米の安全保障に関して初期の焦点として 2005 年にこのような点が規定されました。

重要なのは、これは私の個人的な考えではあるのですが、このミサイル防衛が日米間の協力というものを先導しているのではないのでしょうか。将来的に敵国に対する能力を高めることで、これは成功例ですが、SM3 に関して言うと日本のノーズコーンを使って成功裏に飛翔テストを終了いたしました。また SM A バークミサイルは 6 月に共同開発についての合意がなされました。迎撃で最近成功した例としてはハワイで行われたサーベイランス、トラックの演習で SM3 による迎撃があります。デモンストレーションが合同で行われるようになり、飛翔テストに関しても協力するということが、これは非常に力強いことです。また最後に、X バンドレーダーに関しても車力空軍基地に配備されました。これは現実的にみて、また協力という観点から見ましても、戦略的な成功を収めております。そしてこれらは弾道ミサイル防衛を進展させる上でのセンサーという点に関し、新たな課題を投げかけております。ここ最近の多くの建設的な試練というのは我々の協力を図る試験となっており、また戦略面でも前進する契機となっております。そして、これは将来的に

も継続するでしょう。

最近において我々は幾つかの飛行テストを成功させました。これは種々の内容で、インターセプトしたもの、あるいは飛行テストだけのものもあります。また個別のセンサーについての進展の過程でもあります。3月に SM3 が日本のノーズコーンを使用して飛行テストを成功させたことは我々の協力の大きな成果でした。

THAAD の飛行テストを先月行いまして、これに関しては我々も非常に熱狂的でありますけれども、非常に建設的であったと考えております。ちょうど THAAD ミサイルの発射風景をご覧頂けるかと思いますが、こちらはまた別の角度になりますが、レンジセーフティという制約がございました。通常はこういった制約はないのですが、その中で実験を行いました。飛行をご覧になっておりますがまもなくその方向転換をご覧いただけるかと思えます。これが調整をしている段階であります。次に迎撃体をごらんいただけたらと思えます。これは非常に強力なヒット・トゥ・キルのインターセプトをこのシステムでご覧いただけるかと思えます。地上ではこれ以上対応することがないくらいに破壊をしたということです。

最後に、我々は現在非常に楽しみにしておりますのはこのような大変建設的な機会が数多く訪れているということです。戦略的概念からは過去 10 から 15 年の間にキャッチアップモードを進めてきたといえるでしょう。しかし現在日米間でこのミサイル防衛技術に関連して非常に積極的な契機が訪れております。しかし、先ほど長官もおっしゃった様にこの計画はまだ完了したわけではありません。そして出来るだけ速やかに対応しなければなりません。これには多くの可能性がございます。細かい部分では不明な点等もございますが、全体的に、というわけではございません。重要な点はわれわれが様々な計画に取り組み、さらに強固なセンサーやファイヤーコントロールや迎撃体に関するより多くの選択肢、また非常によく統合された指揮統制に基づく戦域管理能力等をこの二国の間で創造し、必要な時に必要なポイントに必要な防衛機能を配備し、国の防衛力を強化することです。これが、我々が取らなければならないひとつの戦略的なメッセージであります。今後のゴールというものは敵に先行した位置を保ち続けることです。敵は弾道ミサイルの複雑化等に対しても継続的に技術を開発し、迅速に柔軟性を持って対応しなければなりません。そのための唯一の手段は我々両国が協力し合うことであると私は考えます。ありがとうございました。